

「井川民具の会」活動紹介

いかわね新聞の読者の皆様こんにちは。井川では、今年度「井川民具の会」を発足しました。今回は、その活動についてご紹介いたします。

民具とは、まず、民具って何？と思う方がいらっしゃるかもしれません。民具は、「私たちの日常の仕事や生活を支えた道具」、「動作を助けてくれる道具」という意味を持つています。例えば、山仕事に使う鋸や鉋、草取りや作物の収穫に使う腰籠（こしご）や、鎌などは農家であれば今でも使われていると思います。また、生活面では、メンパや膳碗、衣類なども含まれます。

渡船場詰所解体 井川では、令和4年12月に渡船場詰所が解体されました。そこには、昭和50年ころに発足した地元有志の会「同心会」によって収集された民具が保管されていたため、その民具の移転先について検討を重ね

いかわね新聞のあゆみ

～あの人は今～

いかわね新聞は平成27年7月1日に第1号が発行され、今年で第20号の発行を迎えることができました。

いかわね新聞の発行を行っている南アルプスユネスコエコパーク静岡地域連携協議会（以下、協議会）は発刊当初10会員でしたが、現在14会員の皆様にご賛同をいただいています。

来年度、南アルプスがユネスコエコパークに登録されて10周年を迎えるにあたり、皆様のご協力のもと、いかわね新聞をはじめ、地域での清掃活動、インスタグラムでの広報活動等の新規事業を通じて、南アルプスの自然や文化を次世代に継承していきます。

さて、そんないかわね新聞ですが、皆様のお気に入りの記事はありますか。

例えば、「いかわねの人々」などでは、いかわねに暮らす人々に焦点を当て、地域に住まう方々の生の声を取り上げさせていただきました。ある人は農家、ある人は登山ガイドや地域おこし協力隊、みんな関わり方は様々だけど、いかわね地域を愛し、守り、盛り上げていこうという思いを持っていました。

また、地域のイベントやいかわね地域の学校間の交流、おすすめスポットなども取り上げさせていただきました。子供たちの笑顔に癒されたり、こんなイベントや場所があったんだ！といった新たな発見などがあつたのではないのでしょうか。

本コラムでは今までのいかわね新聞に登場した方々に焦点を当て、過去を振り返るとともに、現在の姿を追いました。いかわねの今までとこれからに想いをはせてみましょう。



ていると、平成28年に井川小学校と中学校の統合があり、以後、旧井川小学校の校舎が空いていることを知りました。施設借用の許可を得て、令和5年1月、100点近くの民具を搬入することができました。また、地域住民の集まりにおじゃまして、井川の方々に民具の有無をうかがうこともしました。

活動のはじまり 今年度になって、寄贈の申し入れを受けたことをきっかけに、民具収集や整理作業を井川自治会の事業として行うことを承認していただき、正式に寄贈を受けたり借用した民具の展示会を開催し、のべ210人程の方が見学に来ていただきました。

その後、11月上旬現在で500点以上の民具が旧井川小学校に集まってきました。このように、民具を集め保護していくことで、地元の人々だけでなく、井川を知らない人にも、井川で営まれてきた「なりわい」や「暮らし」の

実態を示すことができます。「本物」があることが大切なのです。

井川民具の会は、週1日程を活動日として、旧井川小学校で作業をしています。なお、この活動は令和5年度南アルプス学会研究助成を受けて進められています。



10月に搬入された消防ポンプ



民具展示会に向けて慎重に準備を行う

いかわね新聞発行初期メンバーのいま

いかわね新聞第1号は南アルプスがユネスコエコパークに登録された1年後に発行されました。第1号誌面にあるとおり、せつかくユネスコエコパークの仲間になったのだから「お互いの地域のことをもつと知りたい、知ってもらいたい」という想いから始まったいかわね新聞プロジェクト。今回は初期メンバーの伊熊良至さん、遠藤恵弓さんのお二人にお話を伺いました。

伊熊さん 静岡市環境局で「もったいないを合言葉に、ごみの減量やリサイクルなどを推進するため、学校などで環境教育を行っている。自然散策が好きで、週末は子どもと虫取りに行ったりします。よろしくお願いします。

遠藤さん 2012年に滋賀県から井川へ移住しました。井川支所や集落支援員勤務を経て、現在は子育てをしながら地元企業で事務員をしつつ、地域の新聞製作

井川愛あふれる中村晃さんのいま

南アルプスの大自然や在来作物など、訪れる人を魅了する井川。山深い地で力強く生きる、地域愛あふれる人々にも心惹かれます。朗らかな笑顔が印象的な中村晃さんもその中のひとり。2015年発行のいかわね新聞第2号「いかわねの人々」に登場しています。あれから8年、再びお話を伺いました。

「あの頃と違うところといえば、いろんな『役』をやるようになったな。現在、晃さんは井川地区の体育振興会会長

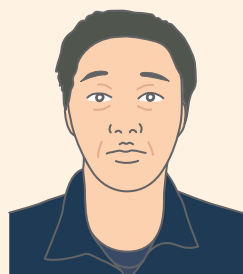
喫茶店「パンセブレ」古林鉄平さんのいま

東京から移住されて10年目を迎えた、いかわね新聞第7号に登場の古林さん。川根本町下長尾にある「四季の里」の2階で、手作りパンやランチを食べることで、経営しています。

川根本町の山が只々好きで移住し、山岳ガイドとし

いかわねを支える力

大井川鐵道(株) 坂本光司さん



Q どんな企業？

弊社は金谷駅～千頭駅・千頭駅～井川駅の総延長65kmを大井川沿いに運行を行っている鉄道会社です。あと1年余りで創立百周年を迎えます。井川線は1959年8月より営業運転を開始し、長島ダム建設に伴い1990年10月アプト式区間(90%の勾配15km)が運転開始しました。井川線区内には日本で唯一のアプト式鉄道、高さ71mを

誇る関の沢橋梁、2019年6月にクールジャパンアワードを受賞した奥大井湖上駅など、数多くの見所を有しております。また廃線となった井川湖周辺「廃線小路」やいちしろ駅周辺の「ミステリートンネル」などウォーキングもお楽しみいただけます。毎年恒例且つ人気となっております星空列車ですが、今年も11月～翌年2月の土日（年末年始除く）に運転しております。



星空列車の様子。奥大井湖上駅にて

Q 企業として今後の展望やいかわね地域で関わりたいことを教えてください。

弊社はトーマスフェア期間中に千頭駅構内にキヤラクターの機関車を展示し、井川線ではトビー号というキヤラクター列車を運行しております。また、ゆるキャン△キャンペーンの実施や、恒例となりました星空列車の運行を行っております。今後も井川線を利用したイベント等を実施し、

地元の方が読んで面白いものを作りたかったですね。

いかわね新聞編集の際の思い出を教えてください。

伊熊さん 地元の良さに注目した新聞だからこそですが、個々人にスポットを当てること、その人の普段知らない一面などに迫ることができたことは興味深かったですね。

遠藤さん そうですね。普段関われない人と深く関わることが私もあり思い出に残っています。新聞の取材を通じて、地域の方々の様々な一面がみられたことが興味深かったです。他にも第二回編集者会議も印象に残っています。新聞のタイトルである「井川と川根をつなぐいかわね新聞」は参加者全員が賛成で案外すんなり決まったんです。大井川流域の2つの地域が1つの新聞でつながるおもしろさを感じながら、まずは編集会議メンバー内で付箋を使って井川と川根の魅力をとくさん共有したりしました。

最後にいかわね地域、読者の方にメッセージをお願いします。



いかわねの良いところを出し合った



いかわね新聞第1回編集者会議の様子

やらねばならない重要なこと。晃さんは、井川の未来を見据えています。

最後に、井川の好きな所を伺いました。いっぱいあるけど、そうだなあ、リパウェルスキー場から眺める南アルプスの大パノラマ、いつ見ても感動するね！たくさんの人に見過してほしいなあ。瞳をキラキラさせながら話す晃さんの姿に、井川が心の底から大好きなんだなあと感じる瞬間でした。青く澄んだ空と雄大な山々が広がる景色は、井川に住む人々の心を豊かにしています。



井川の未来を見据える中村さん



パンセブレの古林さん